

## 2009 年度第 4 回研究会報告書

### タイ文化圏における山地民の歴史的研究

#### 2009 年度第 4 回研究会

日時 2009 年 10 月 31 日 (土) 午後 13:00~18:00

場所: AA 研セミナー室 (301)

報告:

##### 1. 共同研究員全員

『叢書: 知られざるアジアの言語文化』について

##### 2. 伊藤悟氏 (総合研究大学院大学博士課程/日本学術振興会特別研究員)

「徳宏タイ族のシャマニズムと声の文化—ムンヤーンとムンコァンの事例から」

##### 3. 新江利彦氏 (京都大学大学院地球環境学助教)

「ベトナム中部高原山地民の「歴史」—バナの事例」

## 研究会開催の趣旨

山地民はタイ系民族から如何なる形態の上座仏教を受け入れたのかが本プロジェクトで重要な課題になっている。これまでの発表から、徳宏タイ族にみられるような僧侶が不在で、在家信者が儀礼を執り行なう形態の上座仏教が山地民にも受容されたと仮説を立てることは可能であるが、調査事例が極めて少なく、不明な点が多々ある。この度の研究会では、もう一つの参照事例として、徳宏タイ族のシャマニズムを取り上げ、伊藤悟氏に発表して頂いた。

また、ベトナム中部高原山地民の歴史事例として、バナ族の歴史と文化について新江利彦氏に発表して頂いた。さらに、これらの研究発表が開始する前に、『叢書: 知られざるアジアの言語文化』の各自の執筆計画に関する発表があり、また 2010 年の研究会活動について話し合いをもった。(唐立)

## 報告の要旨

### 1. 『叢書: 知られざるアジアの言語文化』について

本年度、このシリーズで刊行する予定の『雲南大理白族の歴史物語—南詔国の王権伝説と白族の観音説話』は、10 月末に AA 研の事務に提出、現在予算化されるのを待っている状況である旨、主査のダニエルスから報告があった。また、9 月 30 日に刊行されたプロジェクト出版物である『タイ文化圏の中のラオス—物質文化・言語・民族』について、編者の一人である園江満共同研究員から報告があった。

今後の刊行計画については次のようなことが報告された。本年度に刊行を予定していた樫永共同研究員の一冊は来年度に提出されることになった。また、黒澤直道研究協力者

が行なうナシ語の原テキストに忠実なトンバ経典を和訳する企画について、配布資料に基づいて説明があった。(唐立)

## 2. 「徳宏タイ族のシャマニズムと声の文化—ムンヤーンとムンコァンの事例から」

本発表では、上座仏教—精霊信仰という従来の枠組みを批判的に捉えながら、中国雲南省徳宏州におけるタイ族のヤーモーやヤーモットと呼ばれるシャマン的宗教職能者について主に徳宏州内の2つの地域を比較し、その社会的役割や村落社会との関係から職能者の地域的特徴を明らかにする。

中国ではシャマニズムは迷信や原始宗教として、負のイメージが付与されてきた。そのため少数民族である徳宏州のタイ族の宗教は政府公認の上座仏教というラベリングに包まれ、多様な宗教実践は覆い隠されてきた。近年になって芸術的側面といった多様な宗教要素を文化遺産として価値付ける風潮もあり、見直しが行なわれ始めている。

発表者は、これまでムンヤーンとムンコァンで行なった調査から、両地域におけるシャマニズムを比較し、地域によってシャマニズムの様相が異なることに気づいた。両地域においても仏教教義的な見地からシャマニズムを迷信とするが、今も村々では新しいシャマンが多く出現している。ムンヤーンでは、シャマンは葬儀において死者の魂を済度する儀礼をとりおこなうなど明確な社会的役割があり、さらにムン(くに)や村を守護する社会的地位が付与されている。それに反して、ムンコァン—帯では、葬儀はすべて仏教的所作にのっとるべきものであり、シャマンには社会的役割がなく、その活動は託宣など個人的問題解決に限定されている。ムンコァンでは仏教の影響力が強いためか、シャマンの守護霊は仏教に帰依した存在であり、家の祭壇にも仏教的儀礼を経て安置された仏像がある。一方それとは対照的に、ムンヤーン—の守護霊と仏教の関係は曖昧である。

また、従来の視点からは上座仏教徒としての来世志向の積徳行意が強調される。しかし、豊かな書承と口承の世界を育む占星術やシャマンたちをめぐる日常の実践に肉迫すれば、上座仏教的積徳行意が現世利益のために再解釈されてなされているという実践の両義性が浮かび上がる。

本発表では、こうしたタイ族の宗教を従来の上座仏教と精霊信仰という二項対立で捉えることに慎重な立場をとる。なぜなら、徳宏では上座仏教よりも先に北伝仏教や道教、儒教、漢族の民間信仰などの伝播があったという歴史もあり、さらに過去の権力者と宗教の関係や人々の日常生活での様々な信仰の受容などを現地調査と歴史研究から再考しつつ明らかにしなければならないからである。

このような課題に取り組むにあたり、徳宏州およびその近辺を文化や宗教実践の差異から3つの地域圏—すなわち上方地域(ムンラー、ムンディー、ムンヤーン、ムンワン、保山、騰衝など)、中部地域(ムンコァン、ムンキー、ムンジェーフアンなど)、下方地域(ムンマオからビルマ、耿馬など)—に想定し、今後の歴史の変遷とタイ族文化の混淆性に関する研究の基礎的枠組みを提唱する。(伊藤悟)

### 3. 「ベトナム中部高原山地民の「歴史」ーバナの事例」

旧フランス領インドシナ中央高地は、現在、ラオス・ボロヴェン高原（3省）、カンボジア・モンドルキリ高原（1省）及びラタナキリ高原（1省）と、ベトナム中部高原（西原、5省）の3つの広域行政区分に分断されている。当該地域の山地民の歴史については、Henri Maitre『モイの森』を嚆矢として、Nyo『フランスのインドシナ中央高地征服』、Dambo『南部インドシナ中央高地諸民族』、Georges Condominas『森を食べる人々』、Jean Boulbet『マーの国、神霊の国』、Gerald Canon Hickey『ベトナム中部高原民族史』、Phan Văn Bé『西原史略』などの著作がある。Dambo, Condominas, Boulbetらはほとんど文献によらず、自らの聞き取りをもとに歴史を再構成した。彼らにこのような歴史叙述を行うことができた背景に、彼らが調査対象としたオーストロアジア語族モンクメール語南バナール支の話者—Koho, Maa, Mnôngが、20世代にわたる長大な口承系譜を伝えていることがある。しかし、バナBahnarをはじめとする北バナール支の話者は、隣接するラオ（Lao）やチャム語支話者（Jarai, Rhade/Ede）と同様に、口承系譜をほとんど伝えていない。

バナBahnarの「歴史」に関して、最近の調査から以下のことがわかってきた。

1. ベトナム戦争やその他の原因で移住が繰り返されている。
2. 戦争以外の原因には客観的に理解できるもの（農地不足）できないもの（落雷）がある。
3. 移住した先に元の集落名を「もっていく」。そのためか、長老であっても戦争中の複数の移住先の地名をよくおぼえていない場合がある。
4. 移住の多い集落はマルタバングャーや銅鑼などの威信財が少ない。
5. 新規開拓農地の配分が長老の指図によらない。
6. 過去の口承系譜は3世代程度（父、祖父、曾祖父）程度しか覚えてない。これは氏族近親婚を避けるために最低限必要な系譜らしい。5世代を超えると別氏族と見なされる。
7. 双系・選系的な親族組織を持ち、父系・母系双方の祖先を「選んで」その氏族を名乗る。個人が複数の氏族に属するので、単に所属氏族を問われた場合に答えることができない。
8. 集落内の氏族数と氏族の名称（直径祖先の名前）が言える者は長老などに限られる。
9. 歴史叙述・祖先祭祀が極めて限定的にしか存在しない。大祖母ヤ・ハラ（Hơ Amon）の伝承は例外的。
10. 「ボク・ロホ、ヤ・ロイン夫婦神話体系」というべき特定の家族が登場する膨大な史詩（Hơ Amon）を民族全体が共有し語り伝えているが、歴史叙述要素はほとんど無い。

なぜバナはこのような歴史叙述と口承文学伝統を持つのか、歴史学、人類学や農業生産などと絡めて議論を行いたい。（新江利彦）

来年度の研究活動について、共同研究員の間で議論が行われた。賛否両論が表明されたが、成果論文集をまとめる意向で意見の調整をみた。だが、柱となる課題など、来年度取り上げるテーマは継続審議となった。

二つの発表に対して活発な質疑応答が行なわれた。伊藤氏が現地で撮影したビデオを上映したことも手伝って、シャマンの儀礼に対して具体的なイメージを聴衆が得ることが

できた。討論はモームンとスームンの関係、ヤーモーとヤーモットの相違、済度や呪術師など用語の問題や、発表者が徳宏州タイ族文化を上中下の三地域に分類する根拠などに集中した。新江氏の発表については、内容からするとバナ族に対して氏族という用語をするのは適切ではないなどの指摘があった。(唐立)